

要望演題 | 2-03 外科治療遠隔成績

要望演題2

両側肺動脈絞扼術

座長:

新保 秀人 (三重大学)

原田 順和 (長野県立こども病院)

Thu. Jul 16, 2015 11:00 AM - 11:50 AM 第4会場 (1F ジュピター)

I-YB2-01~I-YB2-05

所属正式名称: 新保秀人(三重大学医学部 胸部心臓血管外科)、原田順和(長野県立こども病院 心臓血管外科)

[I-YB02-01]両心室修復に向けた Flow adjustable bilateral PA bandingの 中期成績

○内藤 祐次¹, 田中 佑貴¹, 吉竹 修一¹, 池田 健太郎², 石井 陽一郎², 中島 公子², 田中 健佑², 小林 富男², 宮本 隆司²
(1.群馬県立小児医療センター 心臓血管外科, 2.群馬県立小児医療センター 循環器科)

Keywords: 両心室修復, 新生児, 複雑心奇形

【背景】当院では balanced ventricleを有する大動脈縮窄・離断複合 (CoA/IAA), 総動脈幹症 (Truncus) などの疾患群に対し, 積極的に Flow adjustable bilateral PA banding (FABPAB)を用いた hybrid approachによる段階的修復術を採用し, 新生児期の一期的根治術と比較し良好な早期成績を報告している。【対象・方法】2007年10月から2014年8月までに両心室修復可能と判断された CoA/IAA, Truncusに対し施行された FABPAB症例15例を後方視的に検討し, 中期成績を検討した。【結果】心室大血管形態は, CoA/IAA 13例, Truncus 2例であり, 胸骨正中切開から初回姑息術として FABPABを施行 (手術時平均日齢 9.0; 平均体重 2.6 kg) した。必要な症例には catheter interventionによる末梢肺動脈拡大術を追加し, 第2期手術直前の PA indexは 199 ± 106 まで改善した。CoA/IAA群において, FABPAB術後待機中の2例を除き, 両心室機能が十分と判断された5例は一期的に aortic arch repairおよび心内修復術を選択した。また, 左室流出路狭窄などの解剖学的危険因子をもつ6例に関しては Norwood型手術を介在させ, 4例が両心室修復(Rastelli手術)を完遂し, 右室低形成 (RVEDV 67%) の1例は段階的な Fontan型手術を選択し, 1例が両心室修復待機中である。Truncus群においては, 2例ともに Rastelli手術を終了している。FABPABからの平均観察期間 3.1 ± 2.0 年で対象コホートでの死亡例はなく, Truncus群で再手術 (Rastelli conduit吻合部狭窄) を1例認めた。両心室修復した11例中7例で修復後のカテーテル検査を施行し, 平均 RVP/LVP 0.47, LVEDVI 134 % of normal, LVEF 71%, RVEDVI 99 % of normal, RVEF 65 %で, 術後約2年の時点での平均 BNPIは112 pg/mlであった。【結語】 FABPABを用いた hybrid approachによる段階的修復術は両心室修復を前提とした複雑心奇形にも有用であり, 新生児期の人工心肺使用に伴う侵襲を回避でき, 良好な遠隔成績が期待できる。